

日本英語教育史学会 第 293 回 研究例会

日 時：2023 年 7 月 15 日（土）14：00 ～ 17：00

オンライン開催：申込方法については、学会ウェブサイト（<http://hiset.jp/>）内の「オンラインによる研究例会 参加方法」をご参照下さい。

参加費：無料

○ 自著を語る

柁木貴之著『国語教育と英語教育をつなぐ：「連携」の歴史、方法、実践』

（東京大学出版会，2023 年 3 月）

著者：柁木貴之（北海学園大学）

【概要】本書の目的は「国語教育と英語教育の連携」に関する歴史を記述した上で、歴史上の提言と実践を根拠に目的と方法を提案し、それに基づいて行った実践について考察を行うことである。新学習指導要領において、「連携」は新しい発想に見えるが、本当にそうなのだろうか。歴史を振り返ることで、「連携」の議論は明治期から現代まで連綿となされてきたことを示す。その上で、これまでに行われた実践の成果と課題について検討したい。

指定討論者：江利川春雄（和歌山大学名誉教授）

○ ミニ・シンポジウム

英語教育における「ローマ字」を考える — 通時的・共時的な視点から

話題提供者：河村和也（県立広島大学）、久保野雅史（神奈川大学）、

拝田清（和洋女子大学）、堀由紀（和洋女子大学大学院〔院生〕）

【概要】本ミニ・シンポジウムでは、英語教育における「ローマ字」にまつわる諸問題を取り上げ、論点整理を行う。英語教員の中には国語科における「ローマ字」指導を英語学習の阻害要因とみなす者もいれば、「ローマ字」の知識が英語理解の助けになると考える教員もいる。そもそも、「ローマ字」とはラテン・アルファベットのことで、このラテン・アルファベットを用いて日本語を表記するのがいわゆる「ローマ字表記」であるのだが、この表記方法を単に「ローマ字」と呼ぶことも多く、このあたりも様々な混乱の要因となっているようである。話題提供者である拝田と堀は、「ローマ字」の歴史的変遷を概説する。拝田が歴史的な経緯を報告し、堀が現在の「ローマ字」の扱い方を国語教育との関係から報告する。河村はヘボン式と訓令式の特徴について報告をし、久保野は英語教育学において「ローマ字表記」をどう位置付けるかについて話題提供をする。フロアからの活発な意見・提案を期待している。

問合せ：日本英語教育史学会 例会担当 reikai(at)hiset.jp (at)を @ に変えてください。